【研究ノート】

夢の中で裁判した戦乱の人たち

金　永　昊

一、はじめに

『三国志演義』の人物は『西漢演義』[注1]の人物の生まれ変わりであり、『西漢演義』で恨みを持った人物たちが『三国志演義』の人物に転生して恨みを晴らしているのだとする設定は、中国では古くからあったようである。例えば、元代の歴史小説『新編五代史平話』に収録されている「梁氏平話」[注2]を引用すると次の通りである。

劉季殺了項羽、立著国号曰漢。只因疑忌功臣、如韓王信、彭越、陳豨之徒、皆不免族滅誅夷。這三個功臣、抱屈銜冤、訴于天帝。天帝可憐見三功臣無辜被戮、令他毎三個托生做三個豪傑出来。韓信去曹家托生、做著個曹操。彭越去孫家托生、做著個孫権。陳豨去那宗室家托生、做著個劉備。這三個分了他的天下。曹操簒奪献帝的、立国号曰魏。劉先主図興復漢室、立国号曰蜀。孫権自興兵荊州、立国号曰呉。三国各有史、道是三国志是也。

（劉邦は項羽を殺し、国を立て、漢と名付けた。しかし、韓信・彭越・陳豨のような功臣を疑ったため、三人はみな九族まで殺される禍を避けることが出来なかった。この三人の功臣は、冤罪を受けて恨みを抱き、天帝に訴えた。天帝は、罪がないにもかかわらず殺された三人の功臣を見て不憫に思い、三人をそれぞれ豪傑として生まれ変わらせるようにした。つまり、韓信は曹家に生まれ曹操になり、彭越は孫家に生まれ孫権になり、陳豨は劉氏の宗室に生まれ劉備になり、この三人は天下を三分した。曹操は献帝の位を簒奪して、国を立て魏とし、劉備は漢室の興復を図って、国を立て蜀とし、孫権は自ら荊州で兵士を興して、国を立て呉とした。三国はそれぞれ歴史を持ち、それを全て三国志と言う。）

ここでは、韓信・彭越・陳豨の三人は罪がないにもかかわらず殺されたことを恨み、天帝に訴えたこと、そして天帝は三人の訴えを認め、韓信は曹操に、彭越は孫権に、陳豨は劉備に生まれ変わらせ、天下を三分するという内容が記されている。

それが、元末の至治年間（一三二一～一三二三）の『至治新刊全相平話三国志』（以下、『三国志平話』）では、登場人物が原告と被

告になり、裁判が行われるという形式がとられる。また、明末の馮夢龍（一五七四～一六四六）が編纂し、明末に刊行された『古今小説』第三十一巻「鬧陰司司馬貌断獄」では、物語の内容が『三国志平話』より更に複雑になり、〈第一裁判〉から〈第四裁判〉というふうに、『西漢演義』を題材にした裁判四件が体系的に行われ、登場人物たちはやはり、『三国志演義』[注3]の人物に転生している。

このような内容は、日本と韓国においても非常に大きな人気を集めた。日本では都賀庭鐘（一七一八～?）による『英草紙』（一七四九年刊）の第五編「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」で、安徳天皇・源範頼・源義経・畠山重忠ら源平合戦時代の人物が訴訟を起こし、新田義貞・楠正成・足利尊氏のような南北朝時代の人物に転生するというふうに、完全に日本化がはかられた翻案作が生まれた。一方、韓国の場合、朝鮮時代後期における中国白話小説の流行を受け、書写時期未詳の『제마무전（諸馬武伝）』（以下、『諸馬武伝』）の写本群が現れ、[注4]植民地時代に入ると【図1】で紹介するような旧活字本による『몽결초한송（夢決楚漢訟）』（以下、『夢決楚漢訟』）が一九一一年に、そして『교정제마무전（校正諸馬武伝）』（以下、『校正諸馬武伝』）が一九一六年に刊行された。

中国の文学を受け入れる際に、日本と韓国はそれを無条件的に受け入れるのではなく、完全に消化し、抵抗・取捨選択・改変を行ったうえで、影響作や翻案作などを生み出したことは周知のことである。本話に関していえば、各人物の転生の論理・創作意図・判決の内容・歴史認識などを比較し、日韓両国ではいかなる形で独自の世界が構築されたかを究明するのが重要な課題になる。それによって、日韓両国の文化の主体性や特質の一端をうかがうことが出来、そこにはいかなる文化的な背景、あるいは価値観の違いがあったかを明らかにすることが出来るであろう。本研究ノートでは、このような課題を解決するための手掛かりとして、右に紹介した作品たちの訴訟及び判決の内容をまとめることにしたい。

二、『三国志平話』

「平話」とは、宋・元代の盛り場で講釈師が聴衆に語った歴史物を書物化したもので、二階堂善弘・中川諭訳注『三国志平話』（光栄、一九九九）によれば、「『三国志平話』は、中国における一大歴史小説『三国志演義』が成立するための、一つの原型として位置づけることができる」そうである。『三国志平話』は、本筋の物語に入る前に、巻之上で司馬仲相が冥界で裁判を行った話が入っているが、その内容を表でまとめると次の通りである。[注5]

①登場人物の訴訟及び判決内容

原告		被告		原告の訴訟内容	被告の弁解内容	判決内容
人物	転生	人物	転生			
韓信	曹操	劉邦	献帝	大功がありながら、無実の罪を着せられ、劉邦に殺されたこと。	劉邦は、呂氏が自分に代わって政務に当たっていたため、知らないことだとする。	劉邦が功臣に背いたことは明白であることを認め、韓信・彭越・英布の三人に漢の天下を与えることにする。
彭越	劉備	呂氏	伏皇后	漢の設立に力を尽くしたが、自分を用いず殺し、呂氏はその身を切り刻んで諸侯に食べさせたこと。	呂氏は、劉邦から三人を騙して殺すよう指示があったとする。	
英布	孫権			漢の創設に協力したが、劉邦は陰謀を巡らせ、自分を殺したこと。		

②裁判の過程で登場した人物と判決

人物	転生	陳述内容
蒯通	諸葛孔明	呂氏の弁解の証人として呼び出される。咎は劉邦にあるとの詩を詠む。

③主人公についての判決

人物	転生	判決内容
司馬仲相	司馬仲達	司馬仲達は三国を併せ、天下を統一する者になる。

右の表を見ると、『新編五代史平話』では彭越が孫権に、陳豨が劉備に転生するのに対して、『三国志平話』では劉備に転生するのは彭越で、孫権に転生するのは英布になっている。さらに、諸葛孔明に転生する人物として蒯通が新たに設定されていることが分かる。

三、『古今小説』第三十一巻「鬧陰司司馬貌断獄」

『三国志平話』では、『西漢演義』の人物としては韓信・彭越・英布・劉邦など、『三国志演義』の人物としては曹操・劉備・孫権・諸葛孔明が一応登場するが、これだけでは物語の構成において物足りないと考えたのか、馮夢龍は「鬧陰司司馬貌断獄」では『西漢演義』と『三国志演義』でそれぞれ二十二人ずつの人物を登場させている。それでは、「鬧陰司司馬貌断獄」のあらすじを紹介すると次の通りである。

東漢の時代、蜀郡の書生司馬貌は、聡明で優れた学識を持っていたが、五十歳まで官職に就くことが出来なかった。ある時、自分の不遇を嘆く漢詩を書き、それを燃やして寝たところ、夢

で数人の鬼卒が現れ、司馬貌を閻魔王の所へ引き立てて行った。実は、玉帝は詩を読んで、司馬貌を一晩閻魔の位に就かせ、滞った案件を処理させようとしたのであった。司馬貌は、楚と漢の訴訟四件を裁判し、それぞれ三国時代の人々に転生させる。その見事な判決ぶりに閻魔と玉帝は感心し、司馬貌を司馬懿仲達に転生させる。司馬貌は目が覚め、妻に冥府での出来事を語り、来世でも妻と夫婦になることを話して死ぬ。すると、妻も司馬貌の葬儀が終わった後に世を去る。

右の梗概において最も記述の中心が置かれているのは、傍線を引いた司馬貌の裁判の内容である。そして、裁判の基本的な方針は、「恩将には恩で報い、仇将には仇で報い、少しも誤ることはない（恩将恩報、仇将仇報、分毫不錯）」[注6]ということだが、それがどのような論理で実現されているのかが、作品を理解するうえで最も重要なポイントになるところである。

それでは、〈第一裁判〉から〈第四裁判〉までの内容をまとめると次の通りである。

①登場人物の訴訟及び判決内容

〈第一裁判〉

●件名：罪のない忠臣を殺した件

●原告：韓信・彭越・英布

●被告：劉邦・呂氏

原告	人物	韓信		原告の訴訟内容	大きな功績を挙げたにもかかわらず、自分の爵位を落としたこと。
	転生	曹操			
被告	人物	劉邦	蕭何	被告の弁解内容	劉邦が心変わりし、韓信を殺せという呂氏の命令に従っただけ。
	転生	献帝	楊修		蕭何は自分を推薦したにもかかわらず、殺害したこと。
				判決内容	韓信の功績と忠が認められ、漢に背く意図はないとされる。咎は劉邦にあるとし、献帝は一生曹操に苦しめられる。 楊修は抜群に聡明で、曹操の主簿として大きな俸禄を得るが、曹操の秘密の謀（鶏肋）を見破ったため、殺される。

韓信	蒯通	諸葛孔明	途中で逃げ出し、軍師の職を全うしなかったこと。	韓信の訴えは認められない。蒯通は並外れた知恵者であるため、諸葛孔明に転生し、劉備の軍師として共に国を立てる。
曹操	許負	龐統	蒯通の忠告を聞かなかったのは、七十二歳の寿命を全うするとの許負の占いがあったためで、許負の占いが間違っていたこと。	劉邦は今後韓信を疑うであろうと察したため、楚と連合して天下を三分するよう勧めたが、韓信が聞き入れなかった。寿命を縮めた四つの振る舞いがあり、陰徳を損なったため、計算が不正確になった。	龐統は劉備に仕えるが、三十二歳の時に韓信と同じ年齢で死に、前世での占いが不正確だった報いを受ける。
彭越	呂氏	呂氏	蕭何と謀って、裏切りの濡れ衣を着せ、三族を皆殺しにしたこと。		曹操は伏皇后を苦しめ、殺すことにより、呂氏が韓信を殺した仇に報いる。
劉備	伏皇后	伏皇后	淫乱な呂氏の要求に応じなかったため殺された。体は醤漬けになって諸侯に送られ、自分は謀反の濡れ衣を着せられたこと。	世の中には男が女に戯れることはあっても、女が男に戯れることはない。彭越が自分に手を出したため殺した。	彭越の忠心が認められ、呂氏の話は嘘であるとする。劉備は蜀帝になって天下を三分し、多くの人々に仁と義を称えられる。
英布	孫権		謀反を起そうとしたことはなく、呂氏から彭越の肉醤が届いたことに怒り、使者を殺したため、呂氏から殺されたこと。		英布の主張が認められる。孫権は、呉帝になって江東に台頭し、一国の富貴を享受する。

〈第二裁判〉

●件名：恩を仇で返した件

●原告：丁公

●被告：劉邦

原告	人物	丁公	原告の訴訟内容	劉邦を包囲した時、天下を均分するという甘言を信じて命を助けてあげたが、後に劉邦に殺されたこと。紀信は忠臣なのに爵を一つも与えなかったのは不義である。不忠の項伯、項羽の将軍雍歯を諸侯に封じたのはなぜか。	
	転生	周瑜			
被告	人物	劉邦	被告の弁解内容	臣として主君に不忠なる者を戒めるため。	
	転生	献帝			
			判決内容	周瑜は、孫権のもとで将軍になるが、諸葛孔明に対する憤りのあまり、三十五歳で死んでしまう。したがって、前世では項羽に仕え通すことが出来ず、来世でも孫権に仕え通すことが出来ない。	

〈第三裁判〉

●件名：権を専らにして位を奪った件

●原告：戚氏

●被告：呂氏

原告		被告		原告の訴訟内容	被告の弁解内容	判決内容
人物	転生	人物	転生			
戚氏	甘夫人	呂氏	伏皇后	劉邦から寵愛を受け、息子を太子に立てると約束された。しかし、劉邦の死後、息子の如意は毒酒を飲まされ死に、自分は残酷な刑罰を受けて死んだこと。		戚氏は甘夫人に転生し、劉備の正室になる。彭越と夫婦になれば、呂氏は妬まないだろう。

〈第四裁判〉

●件名：人を死に追いやった件

●原告：項羽

●被告：王翳・楊喜・夏広・呂馬童・呂勝・楊武

原告		被告		原告の訴訟内容	被告の弁解内容	判決内容
人物	転生	人物	転生			
項羽	関羽	夏広	孔秀	垓下の戦いで敗れ逃げて行く際、わざと誤った道を教えたこと。		関羽は、劉備と桃園で義を結んで、共に国の基を築く。項羽は秦王の子嬰を殺し、咸陽を焼き払ったため、関羽は無残な死に方をする。しかし、項羽は太后を殺さず、呂氏を汚さず、酒席でひそかに人の命を狙うようなことはしなかった三徳により、来生でも義勇剛直で、死んでから神となる。 六将は、何ら戦功はないことを認める。来生では、みな曹操の部下として転生し、要衝の守りに就くが、関羽の五関突破の際に首を斬られ、前世での項羽の恨みを晴らせるようにする。
		楊武	秦琪			
		呂勝	韓福			
		呂馬童	蔡陽		項羽が自害すると、その死体を分け合ってそれぞれ自分の手柄と申し出たこと。	
		楊喜	卞喜			
		王翳	王植			

②裁判の過程で登場した人物と判決

人物	転生	判決内容
樊噲	張飛	張飛は劉備の部下になる。しかし、前世で樊噲は、妻呂嬃が呂氏を助けて残虐な振る舞いをするのを放置したため、妻の罪に連座し、張飛は無残な死に方をする。樊噲は、生前に忠勇で、人に媚びへつらわなかったため、来生でも義勇剛直で、死んでから神となる。
紀信	趙子龍	劉邦に忠を尽くしたにもかかわらず、一日の富貴も享受していないため、来生では西蜀の名将となる。
如意	劉禅	来生でも戚氏の息子になり、位を継いで四十二年間の富貴を享受して、前世の苦しみを埋め合わせる。
項伯	顔良	項伯は、項羽に背いて劉邦に向かい、富貴を企んだため、項羽にとっては罪人である。来世では関羽によって斬られ、前世の項羽の恨みを晴らす。
雍歯	文醜	仇の封爵を受けたため、項羽にとっては罪人である。来世では関羽によって斬られ、前世の項羽の恨みを晴らす。

③主人公についての判決

人物	転生	判決内容
司馬貌	司馬懿	来世では王侯の位を賜わり、一生将軍と宰相を務める。位を子々孫々に伝え、三国を併呑して、国号を晋とする。曹操は君を欺き、后を殺したが、これは人の手本としてはいけないため、曹操の子孫は司馬懿に苦しめられる。

四、『英草紙』第五編「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」

続いて、「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」のあらすじを紹介すると次の通りである。

弘安年間、後宇多天皇の時代のことである。紀任重は聡明で優れた学識を持っていたが、五十歳を過ぎても官職に就くことが出来なかった。ある時、自分の不遇を嘆く和歌と漢詩を書き、それを燃やして寝たところ、夢で数人の鬼卒が現れ、紀任重を閻魔王の所へ引き立てて行った。実は、玉帝は詩を読んで、紀任重を一晩閻魔の位に就かせ、滞った案件を処理することを命じたのであった。紀任重は、源平の争乱の訴訟三件を裁判し、それぞれ南北朝時代の人々に転生させる。その見事な判決ぶりに閻魔と玉帝は感心し、紀任重を脇屋義介に転生させる。紀任重は目が覚め、隣の老翁を呼んで冥途での裁判のことを語り、その後、死んでしまう。隣の老翁は気の毒だと思い、その死骸を近くの林の中に葬った。

右のあらすじを見ると、聡明で優れた学識を持っていたが、五十歳を過ぎても官職に就くことが出来なかったという紀任重の人物設定、夢で閻魔王の所に引き立てられたこと及びその理由、冥途での裁判、玉帝が任重の見事な判決ぶりに感心する点、任重の転生など、

話の骨格は原話とほぼ同じである一方、時代を弘安年間後宇多天皇の時代にしている点、主人公を紀任重という日本人に設定した点において、見事に日本化がはかられた作品であるといえよう。その中で、傍線を引いたところが本話の最も重要なところで、〈第一裁判〉から〈第三裁判〉までが原話の体裁に倣って行われている。

それでは、各裁判及び判決内容について確認してみよう。

①登場人物の訴訟及び判決内容

〈第一裁判〉

●件名：幼児を騙して、入水死に至らせた件

●原告：養和時代の幼年天子　言仁（安徳天皇）

●被告：平清盛の妻　二位尼

原告		被告		原告の訴訟内容	被告の弁解内容	判決内容
人物	転生	人物	転生			
安徳天皇	阿野廉子	二位尼	西園寺実兼の娘	自分の母は平氏であっても、自分は帝位に就いているため、敵軍に渡されても殺されないはずだった。しかし、二位尼が分別のない自分を連れて、一緒に海に身を投げたこと。 自分の母建礼門院が、悪人清盛の娘だとして嫌われたこと、そして、母が兄宗盛と密通して自分を産んだという噂が広がったこと。		安徳天皇の訴えが認められ、二位尼は安徳天皇が実は女の子だったことを隠すために、一緒に入水したとする。来世では、南朝の天子の母になる。 二位尼は、来世では后になるはずだが、帝の寵愛を廉子に奪われ、帝に会うことも出来ない。

〈第二裁判〉

●件名：功績を挙げたにもかかわらず、兄弟を死に至らせた件

●原告：源範頼、源義経

●被告：源頼朝、大江広元

原告 人物	原告 転生	被告 人物	被告 転生	原告の訴訟内容	被告の弁解内容	判決内容
源範頼	楠正成	源頼朝	護良親王	義経とともに平氏を滅亡させ、大きな功績を挙げたが、結局追放され、無念のまに死んでしまったこと。		範頼は義経を恨み妬んだため、来世では新田義貞の下でその命令に従うのみで、才能を発揮出来ない。
源義経	新田義貞			壇ノ浦の戦いで平氏を破るなど、大きな功績を挙げたが、大江広元らの讒言により、兄頼朝は土佐房正俊を送り自分を殺そうとしたこと。その後、自分は散々苦労をしたあげく、衣河の館で自害したこと。		源氏の再興には義経の功績があったことを認め、来世は鎌倉幕府を倒し、天下を二分する勢力を持つ。頼朝は度量が狭く、残忍だった応報により、来世では直義の命令で淵辺によって首を斬られる。
		江田源三	足利直義	平氏が滅亡した後、義経のもとから途中で逃げ出したこと。	畠山重忠と親交を結び、梶原景時には全てのことを相談し、頼朝から嫌われないようにし、後白河院に頼るよう助言したが、義経は聞かなかったため。	江田源三の智恵と軍術が認められ、来世では足利尊氏の弟直義に転生する。兄と力を合わせて高師直を討つ。
		吉岡鬼一	高師直	自分が江田源三の忠告を聞かなかったのは、七十一歳の寿命を全うするとの吉岡鬼一法眼の占いがあったため。	寿命を縮めた四つの振る舞いがあり、陰徳を損なったため、計算が不正確になった。	吉岡鬼一の占いが不正確だった罪を認め、その報いとして来世では足利の執権役になるが、四十一歳で殺される。
		大江広元	赤松円心	頼朝の師であり、儒教の学問を究めたにもかかわらず、義経兄弟の仲を裂いたこと。	主人たる頼朝と天下のための方策だった。義経は権威をほしいままにし、兄頼朝の気を悪くさせた。	大江広元は頼朝に道理に則った正道を教えなかったとする。来世では、楠に次いで功績はあるが、領地は少ない。

〈第三裁判〉

●件名：功績のあった臣下を嫌い、一家断絶させた件

●原告：畠山重忠

●被告：北条時政、北条政子

	人物	転生	原告の訴訟内容	被告の弁解内容	判決内容
原告	畠山重忠	足利尊氏			
被告	北条時政	北条高時			時政は前世に功績のある臣下を謀殺した報いとして、来世では鎌倉幕府を受け継ぐも一族みな滅亡する。
被告	北条政子	北畠師親の娘（民部卿の局）	淫乱な政子の要求に応じなかったところ、政子は時政の後妻牧の方と共謀し、自分が謀反を起そうとすると讒言したため、親子共に滅ぼされたこと。 自分は広い領地と豪華な家、美食美衣の生活をし、奥向きには美女がたくさんいるため、政子のような年増の女に手を出すはずがない。政子は頼朝と密通をするなど、貞操堅固でない女である。	世の中には女のほうから先に男に戯れることはない。重忠が自分に淫らな心を起こしたので叱ったところ、彼が逃げたため、他のことにかこつけて罪を罰した。	重忠の「忠心」が認められ、政子の言葉は嘘であるとする。重忠の滅亡は北条家の謀略のためであるとし、来世には北条家と親類関係になるが、機会を掴んで朝廷軍に加わって新田と天下を両分し、更に天下を統一して将軍職に就く。 政子は、北畠師親の娘に転生し、一度は後醍醐天皇の寵愛を受けるが、息子護良親王が直義に殺された後は、悲しみの中で亡くなり、前世で重忠を殺した報いを受ける。

②主人公についての判決

人物	転生	判決内容
紀任重	脇屋義介	新田義貞の弟として、南朝の土台をなす臣となる。希望は叶えられても、苦労が多いため、良い報いとは言えない。

右の表を見ると、源義経らを裁く〈第二裁判〉が話の中心になっており、義経の寿命についての尋問を見ると、庭鐘は義経を原作の韓信に、江田源三を蒯通に、吉岡鬼一を許負に対応させていることが分かる。また、〈第三裁判〉で、女のほうから先に男に戯れることがないという内容の尋問から、畠山重忠を彭越に、北条政子を呂氏に対応させていることが分かる。そして、これらの人物の転生にあたってどのような論理が反映され、庭鐘のいかなる思想や歴史観などが見出せるかが、作品を読み解くうえで最も重要なところである。

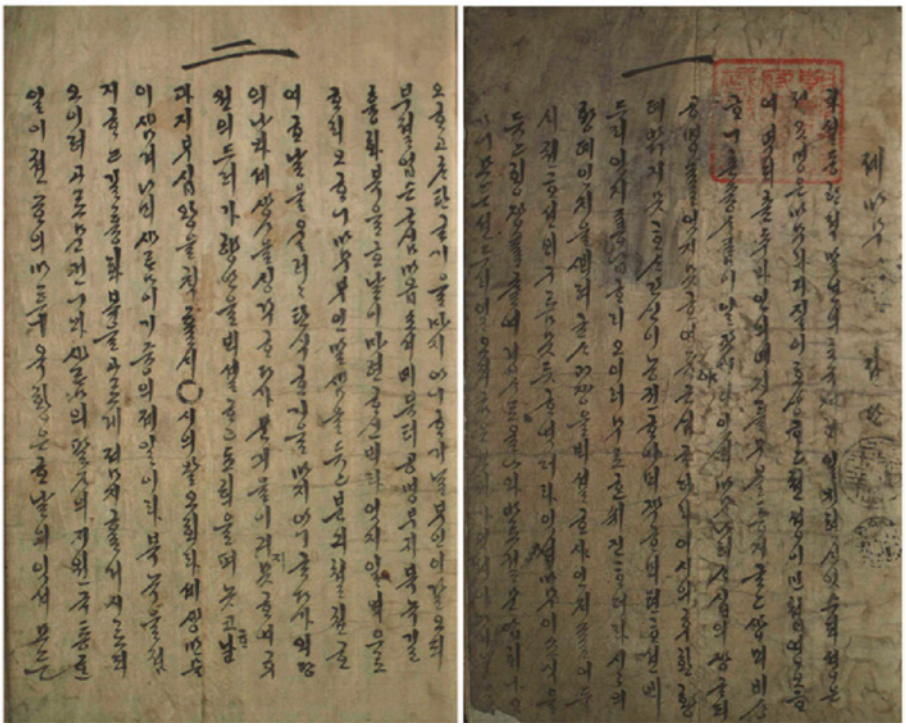
ここで注目すべきところは、任重は「決断明白、恩は恩を以て報ひ、仇は仇を以て報」いると、原作の「恩将には恩で報い、仇将には仇で報い、少しも誤ることはない」という裁判の方針を忠実に受け継いでいるにもかかわらず、転生した人物たちは前世での恨みを復讐する関係になっていない点である。例えば、源義経と範頼は、兄頼朝を訴えるのだが、任重の判決によって彼らが転生した新田義貞・楠正成・護良親王は、南朝において同盟関係を結ぶ。これについては三宅正彦氏に詳論があり、氏は「初期読本作家・都賀庭鐘の思想―「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」の分析をつうじて―」（『大阪城南女子短期大学研究紀要』第一号、一九六六）で、「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」では「対立関係の設定が不明確になっている」ことを指摘し、その理由として「革命思想自体が、庭鐘の受容することのできないもの」であり、「「鬧」で、転生の基準になるのは、生前の功労であるが、「紀」では、道徳性である」と述べられている。右の指摘は、今後の研究の方向性を示唆するものとして注目すべき見解であるといえよう。

五、『몽결초한송（夢決楚漢訟）』

閔寛東・張守連・劉僖俊『韓国所蔵中国古典小説の版本目録』（学古房、二〇一三）によると、韓国には一〇九種の『三国志演義』が現存するという。これは中国古典小説のうち最も多く、その次が『西漢演義』で四十九種、『西遊記』が十五種、『水滸伝』が十二種であるという。また、閔寛東・金明信『朝鮮時代中国古典小説の出版本と翻訳本研究』（学古房、二〇一三）によると、朝鮮時代に翻訳された中国古典小説として、文言小説は『列女伝』『剪灯新話』など十二種、白話小説は六十種があり、そのうち『三国志演義』の翻訳本が最も多いという。その次が『西漢演義』『西遊記』『水滸伝』『列国志』の順で、ほとんどが朝鮮時代後期に翻訳されたと述べている。このように、現存本及び翻訳本の数からも、朝鮮時代後期は『三国志演義』と『西漢演義』が大変大きな人気を博しており、両作品の内容を下敷きにした「鬧陰司司馬貌断獄」の影響作が生まれるための条件は充分に整っていたと言えよう。

韓国の文学史において、ハングルは十五世紀に創製されたため、自国語文学の草創の時期およびその展開の流れは日本より遅い。例えば、日本では平安時代に宮中女流文学が発達したが、韓国の場合、ハングルが作られても知識人男性の文学は漢詩文が中心となり、ハングルは「諺文」として軽視された。これは日本で知識人男性は漢字を「真名」とし、女性は「仮名」を使ったものと似たような現象で、したがって韓国での宮中女流文学の発達は朝鮮時代後期になって行われる。また、日本では仮名草子が十七世紀に全盛期を迎えるが、韓国では二十世紀を前後にようやくハングルが市民権を得るよ

【図1】ソウル大学中央図書館所蔵本『夢決楚漢訟』（一九二五年刊本）。旧活字本による印刷。



【図2】韓国国立中央図書館所蔵本『諸馬武伝』（写本）。上段の漢数字は、本書が貸本屋で流布したことを示す。

うになる。そして、識字率が上がり、庶民を対象にした読み物の需要が爆発的に増加するという日本の仮名草子のような時代も、二十世紀前後になって訪れる。このような状況の中で、作品の素材になったものの一つが、中国短編白話小説であった。〈注7〉

韓国に流入した中国短編白話小説は、三言二拍に限って言えば、『醒世恒言』『今古奇観』は伝本が残っており、『警世通言』は文献としての記録はあるものの伝本はない。韓国梨花女子大学には『拍案驚異奇』という上海鋳記書局で一九一二年に刊行されたものがあるが、その内容は『拍案驚奇』とは異なる。それが二十世紀前後になって、〈注7〉で挙げたように、『今古奇観』を中心にした多くの写本・刊本・旧活字本・新聞連載による翻訳・翻案・影響作が生まれるようになる。

本稿で紹介する『夢決楚漢訟』の場合、おそらく朝鮮時代後期に書かれたと推定される『제마무전（諸馬武伝）』の写本群と刊本群〈注8〉が韓国国立中央図書館、日本東洋文庫、韓国檀国大学図書館、フランス東洋言語文化学校などに所蔵されている。そして、これらの写本・刊本群を校勘して、一九一六年には朝鮮図書から『校正諸馬武伝』が刊行され、一九二二年まで三回にわたって刊行された。

更に、『校正諸馬武伝』が出される前から、『夢決楚漢訟』というほぼ同じ内容を持つ異本が新旧書林から一九一一年・一九一四年（二回）・一九一七年・一九一九年・一九二二年・一九二三年、朝鮮図書に出版社を変えて一九二五年、滙東書館から一九二五年、一九六一年に刊行されており、本書は朝鮮時代末期から植民地時代を経て近現代に至るまで非常に大きな人気を集めた作品といえる。

それでは、『夢決楚漢訟』のあらすじを紹介すると次の通りである。

東漢の時代、寿春の書生諸馬武は、聡明で優れた学識を持っていたが、四十歳を過ぎても官職に就くことが出来なかった。ある時、自分の不遇を嘆く文章を書き、それを燃やして寝たところ、夢で閻魔王の所に引き立てられる。実は、玉帝は諸馬武の文章を読んで呼び出したのであり、諸馬武は一晩閻魔の位に就いて四〇〇年間の間滞った案件を処理することになる。諸馬武は、楚と漢の訴訟に判決を下し、それぞれ三国時代の人々に転生させた。その見事な判決ぶりに閻魔は感心し、諸馬武を司馬炎に転生させる。諸馬武は目を覚まし、妻には冥府で大訟に判決を下したことを話した。諸馬武夫婦は八十歳になるまで富栄えた。

右に紹介したあらすじを見ると、細部の違いはあるものの、話の骨格は原作の「鬧陰司司馬貌断獄」から取っていることが分かる。そして、傍線を引いた諸馬武の判決内容が物語の中で最も重要な部分を占めている。

では、『夢決楚漢訟』での訴訟及び判決内容を表でまとめると次の通りである。

①登場人物の訴訟及び判決内容

原告 人物	原告 転生	被告 人物	被告 転生	原告の訴訟内容	被告の弁解内容	判決内容
劉邦	献帝	英布 彭越 韓信	呂布 劉備 曹操	天下統一の後、各将軍の功績に対し多大な俸禄を与えたにもかかわらず、臣下としての道を弁えず、謀反の心を起こし、誅せられた後にも訴訟を起こしたこと。		
酈食其	周瑜			すでに斉は降伏していたにもかかわらず、韓信が斉を攻撃したため、斉王に煮殺されたこと。		酈食其の功績と訴えが認められる。来世では、赤壁の戦いで曹操の軍を破る。
樵夫	諸葛孔明			韓信に道を教えてあげたにもかかわらず、殺されたこと。		最も同情すべき存在であるとし、樵夫の訴えを認める。来世では、伊尹・呂尚の才徳、管仲・楽毅の智謀を兼ね備え、天文に通じ、地理を弁え、八門遁甲・風雲変化の術、神出鬼没の才を備える。赤壁の戦いでは曹操の大軍を破り、三国第一の人材になる。
龍且	趙子龍			項羽の大将として功績を挙げたが、韓信の奸計に騙され、戦いに敗れ、殺されたこと。		龍且の訴えが認められる。来世では劉備の部下として長坂坡の戦いで曹操の軍隊を破り、黄忠を助ける。
鍾離昧	馬超			韓信は劉邦から謀反の疑いをかけられるのを恐れたため、自分を殺したこと。結局、韓信も禍を避けられなかったため、自分は殺される必要がなかったこと。		鍾離昧の訴えが認められる。来世では潼関の戦いで曹操の百万大軍を破り、曹操はやっと命を助かる。そして、劉備を助けて富貴を極める。
韓信	曹操	劉邦	献帝	天下統一の功績を挙げたにもかかわらず、謀反の疑いをかけられ、殺されたこと。	韓信が謀反を起そうとすることを密告した人がいたため、女の身でありながら国のために韓信を殺した。	韓信は、「蓋世之功」があったにもかかわらず「王侯之楽」を極めることが出来なかったのは残念であるとする。来世では献帝を苦しめ、伏皇后を殺し、前世での怨念を晴らす。 呂氏については功臣と戚氏を殺し、政治を乱した罪を認める。来世では献帝の妻になり、曹操の手に殺され、更には宗族が滅ぼされる。
		韓信	曹操			
		呂氏	伏皇后			

韓信	紀信	周苛	樅公	范増	韓生	義帝	子嬰	陳豨	長生きするという占いが外れたこと。	蒯通からは劉邦に背くよう忠告を受けたが、漢王は天から授かった者であるため、その話を聞き入れなかった。	寿命を縮めた三つの振る舞いがあった。特に、楚の兵士百万を殺したことで陰徳を損ない、二十年が縮まったため、計算が不正確になった。また、蒯通の話を聞き入れなかったことも滅びる原因になった。		
曹操	潘璋	朱然	馬忠	陸遜	呂蒙	孫権	劉禪	魏延					
許負								劉邦					
龐統								献帝					
蕭何	自分を推薦したにもかかわらず、蕭何は呂氏と計らって自分を殺したこと。	滎陽の戦いで劉邦に変装し、劉邦軍を脱出させたが、項羽に殺されたこと。	劉邦のために滎陽城を守って戦ったが、項羽に殺されたこと。	全力で項羽を助けたが、陳平の密告により疑いをかけられ、故郷に帰る途中で死んだこと。	項羽が自分の忠言を聞き入れず、陳平の讒言を信じたため、煮殺されたこと。	項羽は劉邦より後に関中を平らげたにもかかわらず、自分の命令を無視し、結局、自分を左遷したこと。そして、英布・呉芮・共敖を送り、自分を殺したこと。	劉邦に降伏したにもかかわらず、その後、項羽に無残にも殺されたこと。	功績を挙げたにもかかわらず、劉邦から謀反の疑いをかけられ殺されたこと。	功績のある韓信を殺すことは「義」ではないため反対した。しかし、自分も疑われるようになったため、仕方なく韓信を殺した。悪いのは劉邦と呂氏である。				
項羽									許負が魏王豹に対して偽って占いをしたため、魏王は韓信に敗れたこと、そして韓信の寿命の占いを間違えた罪を認める。来世では、劉備を助けて四蜀を攻撃する際に、魏王豹の末裔である張任の矢に当たり、三十二歳の時に韓信と同じ年齢で死ぬ。				
関羽									蕭何は呂氏を戒めず、奸計を用いて韓信とその三族を殺したとする。来世では、曹操との大戦で敗れ、病死し、三人の息子も曹操の手に殺されることで、前世の「無信無義」を戒める。	紀信・周苛・樅公の忠誠と、項羽によって殺された恨みが認められる。来世では、孫権の部下になり、関羽が麦城から西川に逃げる際に関羽を捕え、前世の恨みを晴らす。	范増の訴えが認められ、忠誠が称えられる。来世では孫権の部下になり、関羽を捕え、前世の恨みを晴らす。	韓生の訴えが認められる。来世では孫権を助けて功績を挙げ、関羽を捕えることで怨念を晴らす。	義帝は「仁義」に務めたとされ、項羽に対する訴えが認められる。来世では曹操を破り、関羽を捕え、宿怨を晴らす。そして、三分天下の一つを取り、帝業を極める。	秦王になってから四十六日で劉邦に降伏したが、結局、項羽の手に殺された恨みが認められる。来世では西蜀で四十二年間帝業を極める。	劉邦はよく功臣を殺す人であるとし、陳豨の訴えを認める。来世では、劉備を助けて功績を挙げ、諸葛孔明が出兵する時には先鋒に立つ。

原告		被告		原告の訴訟内容	被告の弁解内容	判決内容
人物	転生	人物	転生			
丁公	王朗	劉邦	献帝	劉邦の甘言を信じて殺さずに生かしたが、後に劉邦から殺されたこと。鴻門の会で劉邦を守った項伯はなぜ殺されず諸侯に封じられ、自分だけが「不忠」と言われるのか。	「私情」を重んじ、王には「不忠」であったため、後世の戒めのために殺した。	命を助けてあげたのに殺されたため、丁公が恨みを持つのも当然であることを認める。来世では、曹操に仕え、献帝を苦しませることにより、怨念を晴らす。
虞子期	黄忠			九里山の戦いで敗れ諸将が逃げると、姉の虞美人は自害したため、自分も恨みのあまり自害したこと。		虞子期の忠が認められる。来世では、定軍山の戦いで夏侯淵を殺して曹操を苦しめ、北山の戦いでは軍糧に火をつけるなどの活躍をする。
田横	曹丕			劉邦と同じく王号を持っていたが、劉邦の下に入るのを恥じて自害したこと。		田横は誠なる「義士」であるとし、その死は劉邦によるため、来世では献帝を苦しませ、後には天子の位を奪い、富貴を極める。
周蘭	廖化			九里山の戦いで敗れ、劉邦に侮辱されるのを避け、自ら自害したこと。		周蘭の「忠義」が認められる。来世では甘糜二夫人を助け、関羽の部下として曹操を破って功績を挙げ、諸葛孔明の部下として名を轟かせる。
桓楚	呉班					桓楚の「忠義」が認められる。来世では王植の部下ではあるものの、戦いでは関羽を助ける。後には、諸葛孔明の先鋒に立って魏を攻撃し、功績を挙げる。
彭越	劉備	劉邦	献帝	大きな功績を挙げたが、罪もないのに殺され、体を肉醤にされたこと。呂氏が審食其と私通をしたことからは、彼女の淫欲が深いことが分かる。	彭越は傲慢で「不臣之心」があり、謀反を密告した人がいたため殺した。	彭越は呂氏の讒言により殺されたことが認められる。来世では、関羽・張飛・諸葛孔明と力を合わせ、三分天下の一つを取り、漢の正統を受け継ぐ。
英布	呂布	呂氏	伏皇后	罪のない韓信・彭越を殺し、彭越の体を肉醤にして諸侯に送ったのは「義」ではない。また、謀反の濡れ衣を着せられたため、保身のため起兵したが、結局殺されたこと。		功績を挙げたにもかかわらず殺されたことは同情すべきであるとする。来世では、天下に名を轟かせるような将軍になる。

戚氏	麋夫人	呂氏	伏皇后	劉邦から寵愛を受け、息子を太子に立てると約束されたが、劉邦の死後、息子の如意は毒酒を飲まされ死に、自分は残酷に殺されたこと。
劉邦の甘言を信じたが、呂氏によって無残に殺されたのは同情すべきであるとする。来世では、劉備の妻として皇后になり、その子は皇帝になる。				

項羽					
関羽					
劉邦	呂馬童	呂勝	楊武	楊喜	王翳
献帝	卞喜	王植	秦琪	韓福	孔秀
危機に陥っていた劉邦からの甘言に騙され和親を結んだが、劉邦はその約束を覆したこと。	呂馬童をはじめとした六将(注9)により、自害に追い込まれたこと。				
	項羽が自害した後に四肢と頭部を分けて自分の手柄にしたのは、「人情」では出来ないこととし、来世では関羽に殺される。				

②裁判の過程で登場した人物と判決

人物	転生	判決内容
項伯	龐徳	項羽の季父であるにもかかわらず、鴻門の会の時には劉邦が殺されるのを阻止し、張良と密通した。そして、九里山の戦いでは、劉邦に降伏し、後には諸侯に封じられた。したがって、来世では、最初は馬超の武将になるが、後には曹操に降伏し、関羽によって殺される。
周殷	于禁	項羽の命令を聞かなかったため、項羽が戦いで負ける原因になった。来世では関羽に破られ降伏し、その後病死する。

人物	転生	判決内容
虞美人	普浄	諸馬武は虞美人の生い立ち、死に至る過程を語り、節操を称える。来世では戒刀で関羽の危機を救うようにする。
于英	甘寧	韓信の計略によって殺されたことが認められる。来世では孫権を助けて曹操を苦しませ、多くの功績を挙げる。
烏江の亭長	周倉	項羽に川を渡るように勧めた真心が褒め称えられる。来世では関羽に従い、功績を挙げる。

人物	転生	判決内容
蒯通	徐庶	韓信が蒯通の忠告を聞き入れなかったのは残念なことであるとし、蒯通に罪はないとされる。来世では、劉備の部下として曹操の軍隊を破る。そして、諸葛孔明を劉備に推薦し、大業を成し遂げる手助けをさせる。
樊噲	張飛	鴻門の会で劉邦を救い、戦いでは「功烈」が認められる。来世では、曹操の百万大軍を破り、劉備が漢中を手に入れ、帝業を成し遂げるのを助ける。
周勃	費禕	功績が認められ、来世では蔣琬の後を継いで漢室を助ける。
灌嬰	曹仁	劉邦の部下として、項羽を苦しめたため、来世では曹操の部下曹仁に転生し、戦いでは関羽に破られる。
夏侯嬰	姜維	「知人之感」があるため韓信を推薦し、太子盈を三回も救った「忠誠」が認められる。来世では、諸葛孔明の後を継いで中原を九回征伐し、威名を三国に轟かす。
王陵	蔣琬	劉邦のために太公を救い、多くの功績を挙げたことが認められる。来世では諸葛孔明の後を継いで蜀を守る。
曹参	馬垔	劉邦を助けて功績を挙げたことが認められる。来世では劉備を助けて、名を残す。
陳平	楊修	劉邦から多くの禄をもらったにもかかわらず、賄賂をもらうなど清廉ではなかったとされる。また、呂氏と私通したのは「倫常の罪人」であるとし、韓信を讒言した罪が認められる。来世では曹操の主簿にはなるものの少しだけ聡明で才知があり、「鶏肋」という曹操の秘密の謀を漏らしたため、曹操に殺される。

人物	転生	判決内容
李左車	顔良	項羽に偽って降参して九里山に誘引し、項羽を滅ぼしたため、項羽に恨まれて当然であることを認める。来世では袁紹の先鋒に立つが、白馬津の戦いで関羽によって殺される。
田夫	文醜	民間の農夫であるため楚漢の戦いには全く関係がない身であり、また、楚の百姓として項羽に道を間違えて教えたことを認める。したがって、来世では袁紹の先鋒に立つが、白馬津の戦いで関羽によって殺される。
劉邦	献帝	劉邦は三綱の倫理を弁えていないと非難される。項羽が太公を煮殺そうとすると、劉邦が「一杯の煮込み汁を分けてくれ」と言ったのは「父子の倫」を絶ったものである。また、妻呂氏がいるにもかかわらず、戚氏を求め、その子如意を太子にさせようとするも失敗し、結局戚氏が呂氏によって殺されたのは、「夫婦の倫」を絶ったものである。また、韓信・彭越・英布のような功臣を殺したのは、「君臣の倫」を絶ったものである。義帝のために葬式を行ったのは、董公の言葉を聞いてから、「義」にかこつけて行ったもので、もし、義帝が生きていたならば、義帝の下に入ることはなかったであろうとする。来世では献帝に転生し、天子ではあるものの力はなく、曹操から苦しめられた後、曹丕に天子の位を奪われる。
如意	華歆	曹操が伏皇后を探す際に、華歆は壁の中に隠れていた伏皇后を引きずり出し、苦しませることによって、前世での怨恨を晴らす。
三老董公	司馬徽	項羽が義帝を殺すのを見て「忠憤之心」を起し、劉邦を説得して義帝を発喪し、項羽を攻撃するように勧めたのは、「君臣の大義」を明らかにしたものである。来世では、道徳が高く、知識が優れ、諸葛孔明と龐統を劉備に推薦し、三分天下の大業を成し遂げるようにする。

人物	転生	判決内容
項羽	関羽	大王は英雄であることを称える。鴻門の会の時に劉邦を殺さなかったのは、「人君の道」を弁えたからである。また、太公と呂氏を三年間軍中に置きながら殺さなかったのは「仁人君子」の心であり、太公を煮殺そうとしたが、劉邦と兄弟を結んだ話を聞いて煮殺すのを止めたのは、昔の「情」を忘れていないためである。呂氏が審食其と密通をしているうちに、呂氏を一度も犯さなかったのは、常人なら出来ないことである。亭長が勧めたにもかかわらず烏江を渡らなかったのは「烈丈夫」である。ただ、義帝を殺したことにより、劉邦がこれを口実に大王を裏切り、天下を失うことになったのは残念である。秦王子嬰を殺し、始皇帝の墓を暴いたのは、先祖の怨念を晴らしたことになるため、充分な名分があってのことである。一方で、韓信と李左車の計略によって命を失ったのは恨むべきことである。来世では多くの戦いで大きな功績を挙げ、死んでも千秋万歳に香火を受け、帝号を追尊される。
季布	王平	最初は項羽の部下として功績を挙げ、後は劉邦に仕える。来世では、勇猛と知恵が優れ、諸葛孔明に従って多くの功績を挙げる。
張良	黄承彦	張良の忠誠が認められる。項羽を破るまでの過程が語られ、来世では娘を諸葛孔明と結婚させ、漢室を助ける。道徳が高く、山中に身を隠し、三国の勝敗を眺めた後、神仙になる。

③主人公についての判決

人物	転生	判決内容
諸馬武	司馬炎	三国を統一して国号を晋とし、「治国安民」の政治を行う。

右に提示した表を見ると、まず、目につくのは「鬧陰司司馬貌断獄」と「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」のように〈第一裁判〉〈第二裁判〉のような形式になっておらず、次から次へと人が呼び出され、訴えた後に判決を受ける形になっていることである。

次に、原作と比較した時、『夢決楚漢訟』に登場する人物の数が多いことも指摘出来る。『夢決楚漢訟』では『西漢演義』の張良・范増・虞美人・酈食其・鍾離昧など、『三国志演義』の呂布・馬超・黄忠などの人物を加え、合計五十人が判決を受けることになり、「鬧陰司司馬貌断獄」の二倍を超える人物が登場し、一層豊かな物語になっている。

その中で、特に注目すべきところは、『夢決楚漢訟』では韓信の過ちも認めている点、劉邦より項羽のほうを高く評価している点など、原作の「鬧陰司司馬貌断獄」とは異なる歴史認識が認められる。その他、原作より徹底的に前世での怨念を晴らすことに焦点が当てられている点、原作の矛盾を解消し、全体的な辻褄を合わせた点などが見受けられる。これらの点については更に多くの紙幅を費やして検討していかなければならないので、詳細な議論は別稿を期したい。

六、おわりに

『三国志演義』の人物は、実は『西漢演義』の人物の生まれ変わりであり、『西漢演義』での怨念を『三国志演義』で晴らすという話は、中国において端を発し、日本と韓国においても大変大きな人

気を博していた。本稿では、中国における『新編五代史平話』「梁氏平話」、『三国志平話』、『古今小説』第三十一巻「鬧陰司司馬貌断獄」に至る系譜を整理した。そして、日本における「鬧陰司司馬貌断獄」の翻案作『英草紙』第五編「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」、そして韓国における影響作『夢決楚漢訟』について検討し、各作品における登場人物の訴訟及び判決内容についてまとめた。

近年の比較研究は、自国の作品がどれだけ優秀なのかということを明らかにするための研究が主流をなしているように思われる。仮にそれが他国の作品について十分な研究をした後に下された判断であるならば問題とはならないが、残念ながら他国の作品の長所について看過したり、自国の作品や文化的背景を基準にして、他国の作品を評価したりするような傾向がしばしば見受けられる。今後は、「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」と『夢決楚漢訟』が持つ魅力や特徴について、両者の文学史・文化史的な背景を理解したうえで、客観的な観点からの研究が行われる必要があると思われる。

【注】

〈注1〉楚漢の戦乱を素材とした物語については、『西漢演義』『漢楚軍談』、韓国では『楚漢志』などの複数の言い方で呼ばれているが、本稿では『西漢演義』で統一する。

〈注2〉『新編五代史平話』の本文引用は、《古本小説集成》編委会編『五代史平話』（上海古籍出版社、一九九〇）に収録されている影印本に基づいて、句読点は私に施し、漢字は新字体に直した。

〈注3〉現在の朝鮮半島地域の国と言語について日本ではどのように呼べばよいか、また、朝鮮時代・大韓帝国時代・植民地時代のように時代が経つにつれて、各時代を区別して呼ぶべきかについても様々な議論があり、まだ統一した見解はないようである。筆者は「中国の白話小説は日本と韓国に大きな影響を及ぼした」という文章で、「中国」と「日本」という用語が無批判的に用いられているのに対して、「韓国」「韓国語」という用語のみに厳しい基準を設け、問題視する必要はないと考えている。本稿においては、ある特定の時期について具体的に言及する場合を除き、「韓国」「韓国語」で統一することにするが、これはあくまでも筆者の論考に限るものである。

〈注4〉李民熙『朝鮮のベストセラー―朝鮮後期貸本屋の発達と小説の流行―』（プロネシス、二〇〇七）によると、朝鮮時代に貸本屋が流行し始めたのは十八世紀中期頃で、この時期に人気があったのは中国の演義小説類や朝鮮で創作された英雄小説であったという。そして、現存する最も古い貸本は一八六四年に書写された『南原古詞』で、貸本のほとんどは一八九〇年以降から一九二五年ごろまで約三十五年間にわたって集中的に書写されたものであるという。そして、朝鮮時代後期に貸本屋で流布したのは刊本ではなく、写本が中心であったと述べている。

〈注5〉二階堂善弘・中川諭訳注の前掲書によれば、『三分事略』について、「『三国志平話』とは違う別のテキストに基づいて作られた書物であるかも知れない」と推定している。ここで、劉世德・陳慶浩・石昌渝主編『三分事略』（『古本小説叢刊』第七輯第一冊、中華書局、一九九〇）の内容を確認したところ、『三国志平話』と同じように司馬仲相が冥界で行った裁判の物語が記されていた。

〈注6〉「鬧陰司司馬貌断獄」の本文訳及び内容のまとめは、柴田清継「『古今小説』巻三十一「鬧陰司司馬貌断獄」訳注」（『火鍋子』第四十二号、翠書房、一九九九）を参考にした。

〈注7〉韓国で翻訳・翻案された短編白話小説の一覧を記せば、次の通りである。本目録は金英花「韓国・日本における明代白話短篇小説の翻訳・翻案様相」（韓国高麗大学大学院修士学位論文、二〇一一）の内容に基づき、若干の修正を加えたものである。筆者は『夢決楚漢訟』と『諸馬武伝』を「鬧陰司司馬貌断獄」の影響による再創作として考えているが、金英花氏は翻案作として分類しているため、左に掲げる表においても一応、翻案作として入れておくことにする。また、写本の場合、ほとんどが書写時期未詳である。

番号	原作	作品名	翻訳・翻案状況（訳：翻訳、案：翻案、活：旧活字本、写：写本、新：新聞）
1	今1・醒2	三孝廉讓産立高名	〈訳・活〉『諺漢文今古奇観』第二編（新旧書林、一九一八）
2	今2・醒1	両県令競義婚孤女	〈案・活〉『朴文秀伝』第二編（京城書籍、一九二六） 〈案・活〉『鴛鴦図』（東洋書院、一九一一・一九一二・一九一三・一九二三／博文書館、一九二二）
3	今3・古10	滕大尹鬼断家私	〈訳・写〉楽善斎本『今古奇観』第一編「滕大尹鬼断家私」 〈案・写〉『揚隠闡微』第四編「李府使計全皇甫孤」 〈案・活〉『家庭新小説』「行楽図」（東洋書院、一九一二）
4	今4・古9	裴晋公義還原配	〈訳・活〉『諺漢文今古奇観』第四編（新旧書林、一九一八） 〈案・活〉『朴文秀伝』第三編（京城書籍、一九二六）
5	今5・警32	杜十娘怒沈百宝箱	〈案・新〉『大韓毎日申報』連載（一九〇六）
6	今6・警9	李謫仙醉草嚇蛮書	〈訳・活〉『諺漢文今古奇観』第三編（新旧書林、一九一八） 〈訳・活〉『쥬중긔션리태백실긔』（匯東書館、一九二八）
7	今11・古8	呉保安棄家贖友	〈訳・活〉『諺漢文今古奇観』第六編（新旧書林、一九一八）
8	今12・古7	羊角哀捨命全交	〈訳・活〉『義人の墓』第一話（文昌社、一九二六） 〈訳・活〉『諺漢文今古奇観』第五編（新旧書林、一九一八）
9	今13・古40	沈小霞相会出師表	〈訳・活〉『정텬백일』（博文書館、一九一三）
10	今17・醒11	蘇小妹三難新郎	〈訳・活〉『諺漢文今古奇観』第八編（新旧書林、一九一八）
11	今18・初20	劉元普双生貴子	〈訳・活〉『諺漢文今古奇観』第十編（新旧書林、一九一八） 〈訳・写〉高麗大本『今古奇観』第三編「劉元普伝」

番号	原作	作品名	翻訳・翻案状況（訳：翻訳、案：翻案、活：旧活字本、写：写本、新：新聞）
12	今19・警1	兪伯牙摔琴謝知音	〈訳・写〉『兪伯牙摔琴謝知音』 〈訳・写〉『兪伯牙破琴』 〈訳・活〉『諺漢文今古奇観』第七編（新旧書林、一九一八） 〈案・写〉『사제정륜』 〈案・写〉『金魚伝 単』 〈案・写〉『兪伯牙鍾子期琴謝音』
13	今20・警2	荘子休鼓盆成大道	〈訳・写〉高麗大本『今古奇観』第二編「荘子伝」 〈訳・活〉『諺漢文今古奇観』第九編（新旧書林、一九一八）
14	今22・警17	鈍秀才一朝交泰	〈訳・写〉楽善斎本『今古奇観』第二編「鈍秀才一朝交泰」
15	今24・古2	陳御史巧勘金釵鈿	〈案・活〉『金玉録』（東美書市、一九一四・一九一七）
16	今26・醒36	蔡小姐忍辱報仇	〈訳・活〉『月世界』（大昌書院、一九二二） 〈案・活〉『明月亭』（惟一書館、一九一二・一九一八／朝鮮図書、一九二二）
17	今27・醒7	銭秀才錯占鳳凰儔	〈訳・活〉『銭秀才伝』（大昌書院、一九二二） 〈案・活〉『（弄仮成真）双新郎』（徳興書林・一九三〇）
18	今31・警5	呂大郎還金完骨肉	〈案・新〉『大韓毎日申報』連載（一九〇九）
19	今32・古27	金玉奴棒打薄情郎	〈訳・写〉高麗大本『今古奇観』第四編「朱買臣伝」（「金玉奴棒打薄情郎」の入話）
20	今35・警34	王嬌鸞百年長恨	〈訳・活〉『百年恨（王嬌鸞記）』（匯東書館、一九一三・一九一七・一九二三・一九二四／京城書籍、一九二六）
21	警11	蘇知県羅衫再合	〈案・活〉『月峯山記』（朝鮮書館、一九一六／惟一書館、一九一七／新旧書林、一九一八・一九二四／京城書籍、一九二六） 〈案・活〉『蘇雲伝』（普成社、一九一八） 〈案・活〉『（古代小説）月峯記』（徳興書林、一九一五） 〈案・活〉『蘇学士伝』（博文書館、一九一七） 〈案・写〉『鳳凰琴』 〈案・写〉『蘇学士伝』 〈案・写〉『月峯記』 〈案・写〉『江陵秋月伝』

22	警24	玉堂春落難逢夫	〈案・活〉『碧芙蓉』（匯東書館、一九一二） 〈案・写〉『王慶龍伝』 〈案・新〉『大韓毎日申報』連載（一九〇六）
23	古31	鬧陰司司馬貌断獄	〈案・活〉『夢決楚漢訟』（新旧書林本、朝鮮図書本、滙東書館本、世昌書館本） 〈案・活〉『校正諸馬武伝』（朝鮮図書） 〈訳・写〉『夢決楚漢訟』 〈訳・写〉『諸馬武伝』など ※詳しいことは本稿の本文中に記しておいた。
24	初17	西山観設輦度亡魂	〈案・新〉『皇城新聞』連載（一九〇五）

〈注8〉郭正植「『諸馬武伝』の成立過程と構成原理」（『新しい国語教育』第七十五号、韓国国語教育学会、二〇〇七）によると、『諸馬武伝』は漢文本一種、ハングル写本十種、ハングル京版本（金注：ソウルで刊行された木版本）七種、ハングル活字本（金注：【図1】のような旧活字本による刊行）十七種があるという。このように多くの異本が存することから、『諸馬武伝』が当時大きな人気を博していたことは分かるが、京版本が七種、活字本が十七種というのは、同一版本も含めて「種」と数えているのではないかと思われ、今後更なる検証が必要である。

〈注9〉『夢決楚漢訟』では六将のうち、夏広についての裁判は記されていない。「鬧陰司司馬貌断獄」での夏広は農夫に変装して、項羽にわざと誤った道を教えた人物であるが、『夢決楚漢訟』ではそれに当たる人物として、田夫を設けて裁いているため、夏広の裁判は不要となってしまったものと考えられる。

〈参考文献〉

池松旭『古代小説　夢決楚漢訟』（新旧書林、一九一四）

編者未詳『古代小説　夢決楚漢訟』（滙東書館、一九二五）

李明九「『夢決楚漢訟』研究―中国話本小説との対比を中心に―」（『成大論文集』第三十三輯、成均館大学校論文集、一九八三）

李民熙『朝鮮のベストセラー―朝鮮後期貸本屋の発達と小説の流行―』（プロネシス、二〇〇七）

郭正植「『諸馬武伝』の成立過程と構成原理」（『新しい国語教育』第七十五号、韓国国語教育学会、二〇〇七）

金英花「韓国・日本における明代白話短篇小説の翻訳・翻案様相」（韓国高麗大学大学院修士学位論文、二〇一一）

柴田清継「『古今小説』巻三十一「鬧陰司司馬貌断獄」訳注」（『火鍋子』第四十二号、翠書房、一九九九）

中村幸彦・高田衛・中村博保校注『英草紙』（『新編日本古典文学全集』第七十八巻、小学館、一九九五）

南宮楔『校正諸馬武伝』（朝鮮図書、一九一六）

二階堂善弘・中川諭訳注『三国志平話』（光栄、一九九九）

馮夢龍編『全像古今小説（下）』（福建人民出版社、一九八〇）
閔寛東・張守連・劉僖俊『韓国所蔵中国古典小説の版本目録』（学古房、二〇一三）
閔寛東・金明信『朝鮮時代中国古典小説の出版本と翻訳本研究』（学古房、二〇一三）
丸井貴史「都賀庭鐘『英草紙』の研究史と展望―『江戸時代に開かれた中国白話小説の世界』解説―」（『上方文藝研究』第十四号、上方文藝研究の会、二〇一七）
三宅正彦「初期読本作家・都賀庭鐘の思想―「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」の分析をつうじて―」（『大阪城南女子短期大学研究紀要』第一号、一九六六）
劉世德・陳慶浩・石昌渝主編『三分事略』（『古本小説叢刊』第七輯第一冊、中華書局、一九九〇）
《古本小説集成》編委会編『五代史平話』（上海古籍出版社、一九九〇）
韓国国立中央図書館所蔵本『諸馬武伝』（請求記号：한古朝 48-230）

〔付記〕本稿は令和元年度第三十八回和漢比較文学会大会（於：上智大学）のシンポジウムにおける口頭発表に基づく。発表の前後にご教示やご意見を下さった丸井貴史、金木利憲、長尾直茂の各氏に深謝致します。なお、本稿はＪＳＰＳ科研費、基盤研究Ｃ「日韓両国における中国短編白話小説の受容様相比較研究」（18K00510）の助成を受けた成果の一部である。